

ポストコロナ，少子化時代： 30年後の小児医療と人材育成

濱田洋通

千葉大学大学院医学研究院小児病態学

少子化が加速しています。この原稿を書いている2023年春には2022年1年間の出生数が国の統計開始以来、80万人を初めて下回り、これは従来の人口予測より早いというのです。COVID-19パンデミックの影響もあるでしょう。実際にヒトとヒトとの出会いができない状況が約3年間にわたって続きました。経済格差もあるでしょう。また、働き方改革が広く呼びかけられていますが、まだまだ若者の結婚、出産年齢の方々のキャリアアップと家庭の両立が難しい社会です。

本特集は、20代の小児医療研修中の若手医師諸君が指導層になる30年後の小児医療の将来像について、現在の様々な現場にいる経験者が多角的に論じ、それを読者に感じてもらう企画です。少子化がすすむなか、COVID-19パンデミックによって小児診療は激変しました。感染対策によって大きく疾病構造が変化しています。この変化は一過性でしょうか？否、完全に元に戻ることはないでしょう。旧来の家族制度の崩壊、経済格差の広がり、デジタル化、小児医療は静かに変化していましたが、パンデミックによって一気に顕在化しています。今後、小児医療のニーズに合わせた研修医教育とその先のキャリア形成が必要です。

本特集では、小児医療体制、働き方改革、医療者のダイバーシティ、医療者教育に携わっている指導的立場の方々をお願いして、今後30年の小児医療の展望と若手医療者のキャリアアップに何が必要なかを論じていただきます。第Ⅰ章は、30年後の小児医療の姿と小児医療者教育というタイトルで、大きな視点から30年後を予想していただきました。第Ⅱ章では様々な医療現場から展望と医療者教育について述べていただきました。小児病院、小児療養型施設、医療資源の少ない地域、ITをキーワードにその方面のエキスパートに執筆をいただいています。第Ⅲ章では、新生児、移行期医療、小児外科、子どもの心、多職種、といった小児医療の鍵となる領域に視点を置いて執筆いただいています。

ご多忙のなか、この挑戦的な企画に応えていただいた先生方に深謝いたします。企画者自身も何が正解かはわかりません。多様な立場にいる読者、特に若手医療者に感じるころがあればよいと思っています。